

< 2004年年7月 >

「兵は凶器なり」(26)

15年戦争と新聞メディア

1935 - 1945

永田鉄山暗殺事件の報道

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

軍の総本山、陸軍省内での白昼の恐るべき惨劇

一九三五(昭和十)年八月十二日朝。陸軍省二階の軍務局長室に将校マントをつけた相沢三郎中佐が無言のまま押し入った。軍刀を抜き、ちょうど椅子に座って対談中の永田鉄山局長、新見英夫東京憲兵隊長に近づき、永田はとっさに気づいて難を避けようとしたところを右肩から背部を斬りつけた。

永田は隣室に逃げようと、軍事課長室のドアに身体をあてたが、相沢は体当たりするように背中から日本刀を突き刺し、刃先は体を突き抜け、ドアまで達した。さらに、倒れた永田に向かって相沢はトドメを刺した。

軍の総本山、陸軍省内での白昼の恐るべき惨劇となった。

『東京朝日』の十三日夕刊は一面で「永田陸軍々務局長、省内で兇刃に倒る(危篤)、犯人は某隊付中佐」「不統制の責を負ひ、陸相進退を考慮」と全面をつぶして報道。

十四日夕刊でも一面で「永田局長襲撃の犯人は相沢(三郎)中佐、巷説妄信の兇行」と見出し四段で報じた。

『東京日日』は同じく十三日夕刊一面で「現役の中佐、軍刀で永田軍務局長を斬るけさ陸軍省で執務中」「陸軍部内に衝撃」。

十三日朝刊では「不祥事件＝陸相の態度、此の際一層統制強化、然る後に進退を考慮、部内でも慎重を要望」の見出しが並んだ。

なぜ、軍の中枢部でテロが起きたのか。ちょうど、このころ、嵐のように吹き荒れた軍部主導による天皇機関説排撃の国体明徴運動は、合法的な無血クーデクーの色

彩が強かった。近代合理主義的な考え方は一切排撃され個人主義、自由主義はもちろぬ、あらゆる思想や言論が統制され、時代精神は一挙に逆戻りした。

こうして戦時体制へ向けて軍部独裁が着々と築かれていく過程で、陸軍内での派閥抗争は一段と激化し、皇道派と統制派の対立は抜きさしならぬ状態となった。

もともと、「陸軍パンフレット」(国防の本義と其の強化の提唱)は統制派の国防国家建設の青写真であり、皇道派に対する批判であり、これに対して、国体明徴運動は皇道派の猛烈な巻き返しでもあった。

皇道派の領袖とあがめられていた荒木貞夫陸相当時の皇道派の青年将校の無軌道ぶりは、目にあまるものがあった。

陸軍皇道派の軍紀弛緩

「彼らにおそろしいものはなかった。軍の首脳はその同志であったし、憲兵さえ皇道派に奉仕していた。彼らは有頂点になって国家の志士を気取り、真面目に隊務にいそむ勤勉な将校を職業軍人とけなし、著しい独善に陥っていた」(1)

各連隊長も青年将校の統制に苦しみ、青年将校はますます手がつけれなくなった。元凶の荒木陸相は、一九三四年一月二三日に病気により辞任、皇道派は真崎甚三郎教育總監をかつぎ出そうとしたが、林銑十郎陸相に決まった。

林陸相は肅軍に乗り出し、陸軍内随一の切れ者といわれた永田鉄山軍務局長が中心となり、取り組んだ。

荒木陸相時代の乱れた統制回復、下剋上の風潮の是正に乗り出したが、皇道派の激しい抵抗を受け、肅軍は難航した。一九三四年十月、陸軍パンフレットを発行、軍による統制強化を打ち出した。

一方、陸軍中央部幕僚は青年将校と大同団結しようと懇談会を開催した。国家改造運動をすすめる皇道派青年将校に対して、政治運動を禁じ、軍が国家革新をすすめる方針を示したが、結局、もの別れに終わり、対立はいっそうエスカレートした。

同年十一月二十日にいわゆる十一月事件(士官学校事件)が発覚。この事件は五・一五事件と似たような元老、重臣の襲撃計画で皇道派の村中孝次大尉、磯部浅一

等主計らが逮捕された。

軍法会議で取り調べた結果、証拠不十分として翌一九三五年四月に村中、磯部らは停職処分となった。

このため村中らは、十一月事件は皇道派を弾圧するためのデッチ上げだとしてパンフレット「肅軍に関する意見書」を軍部内にばらまき反撃に出た。皇道派は永田を統制派の中心として憎悪し、怪文書を出して激しく攻撃した。

一方、林陸相らの統制派は皇道派のメンバーを人事異動で一掃するため、巨頭の真崎教育総監を七月十六日に更迭、八月二日には村中、磯部を免官した。両派の対立は頂点に達した。

「血をみなければおさまるまい」との予想どおり、真崎追放一ヶ月後に皇道派による永田鉄山暗殺事件となって爆発したのである。

相沢は福山歩兵第四十一連隊付であったが、八月一日付で台湾歩兵第一連隊付の配属が命ぜられていた。剣道四段で、尊皇の念が強く、性格は直情径行であった。陸軍士官学校で真崎の絶対的信奉者となり、皇道派のメンバーとして、西田税、村中、磯部ら青年将校とも親交を重ねていた。

真崎が更迭された直後に上京して永田軍務局長に会い辞職を勧告した。その後、村中らから送られてきた「真崎教育総監更迭事情要点」「軍閥、重臣の大逆不逞」「肅軍に関する意見書」などの怪文書を読み、皇軍を私兵化する統制派の元凶として永田に一層激しい憎悪を燃やし、殺害を決意した。

犯行当日、陸軍省を訪れた相沢はすぐ旧知の山岡重厚整備局長に会い、台湾行きのあいさつをし、永田局長の在室を給仕に確認させ、山岡局長が止めるのも聞かず軍務局長室に向かった。

凶行後、血だらけになって再び山岡局長室に戻り、「ただいま、永田閣下に天誅を加えてまいりました」と報告した。

山岡は相沢の傷の手当てをしてやり「今からどうするか」と聞いた。相沢は「これから偕行社に行き、買物をして台湾に赴任します」と答えた。

廊下で急を聞いてかけつけてきた憲兵に締めり同行を求められたが、連行の途中

で陸軍省新聞班の根本博大佐がかけつけ相沢と握手した。

相沢本人には罪の意識のケケラもなく、皇道派の山岡や根本の相沢への支援ぶりに軍紀の驚くべき乱れと派閥、敵対意識のすさまじさが示されている。

この事件は内外に異常な衝撃を与えた。なかでも、皇道派青年将校は感激し、相沢を英雄視した。

相沢中佐を英雄視、革新運動盛り上がる、2・26 事件を誘発

右翼は怪文書をばらまき、折から進行中の「国体明徴運動」とともに、革新運動が大きく燃え上がった。

これに対し林陸相は、軍紀振粛を強調し、全軍に訓示、三長官会議、各軍司令官、師団長会議を開いて肅軍を申し合わせた。九月五日、林陸相は責任をとって辞任、川島義之軍事参議官が後任に選ばれた。

相沢は殺人、傷害、用兵器上官暴行などで起訴され、一九三六年一月二十八日から軍法会議が開かれた。

皇道派はこの裁判を「昭和維新」の宣伝の場ととらえ、永田局長がいかにか財閥、重臣らと結託していたかを証明しようと、斎藤実、池田成彬、木戸幸一ら各界実力者を証人に要求した。

在京の歩兵第一、三連隊の青年将校は公判の内容や相沢の証言を熱心に聞かされ、「相沢を乗り越えよ」「相沢精神を引き継げ」が合言葉となっていた。

これが二・二六事件の幅広い決起を誘発した。当時、皇道派内部には公判闘争派とクーデターを旨とする武闘派の二つの流れがあったが、最初、公開されていた公判も、二月十七日に非公開となり、真崎甚三郎が証人として出廷、証言を拒否した二月二十五日の翌日、皇道派は決起した。

二・二六事件を起こしたのである。

こうした血で血を洗う陸軍内の派閥抗争を新聞はどう報道したのだろうか。

軍部内の派閥や対立は軍の機密に関することであり、その報道は「軍民離間」の策動としてきびしく取り締まられた。

一部でも、皇道派や統制派の対立抗争にふれることは発禁や削除の対象になった。

内務省警保局は、永田鉄山暗殺事件発生直後の同日午前十時に「陸軍省発表以外一切新聞二掲載セザル様」との記事差止通牒を発した。

この一方で、憶測や悪質なデマを防止するため陸軍省に概要の発表を要請、陸軍省は同日午後零時十五分に第一報、同午後四時半に永田少将が死亡したことや犯行の概要を公表した。

翌十三日午後一時四十分に犯人の相沢中佐の名前を発表、犯行の動機を「永田中将对する誤れる巷説を妄信した結果」とした。

相沢事件に関する八月中の禁止処分は五十三件で、陸軍省発表前または発表以外の原因の動機について記述したものの十二件、発表以前に事件の発生を報道したものの十件、陸軍部内の派閥関係や対立を書き立て、軍の統制を乱すおそれのあるもの八件などとなっている。

陸軍内の対立や派閥は新聞報道を禁止され、国民にも全く知らされなかった

このように陸軍内の対立や派閥関係を書くことは皇軍の一元化を妨げ、軍の統制を乱し、軍部内の対立を激化するとして一切禁止されたため、新聞では報道されず、国民にも全く知らされなかった。

皇道派、統制派という言葉はもちろん、荒木派、真崎派、肅軍派、宇垣派などの表現も削除の対象にされた。月刊誌『改造』（九月号）の「異動した軍部巨頭」、『経済往来』（九月号）の「石原莞爾と軍統制」「林と真崎」、『時政』（九月号）の「国軍統制の強化 - 1・真崎総監更迭を中心」は軍の統制紊乱として削除されてしまった。

「国体明徴運動」の暴風に対して、沈黙を守り、批判の口をつぐんだ新聞は軍部内の暗闘にも同様の姿勢を示した。新聞を読んだだけでは、この前代未聞の不祥事の原因はさっぱりわからなかった。

『東京朝日』は事件翌日の十三日付社説で「陸軍省内の殺傷事件」と題して論評し

た。

「……部内の現役将校である点において、未曾有の事として、軍内外の視聴を脅かすもの多大、その善後処置についても影響の重大なるを感ぜざるを得ない」としたうえで

「光荣ある帝国陸軍内にこの事ある、実に千歳の恨事ではあるが、既に生じたことは無き前に返すことは出来ない。ただこれを以て、禍を転じて幸となすの方法を講ずるの機会とすることが、今後に執るべき唯一の途である。

しかして我が帝国陸軍の健全性と、正義性を信ずる国民は、その事あるを疑わないのである」

一五日付「善後処置に期待す」では「少壮客気の青年士官ならまだしも、分別盛りの年齢に達した現役の重職にある将校が、巷説妄信の結果、公庁に上官を殺傷するなどとは、殆んど信じ難き不祥事であって、軍紀維持の上は勿論、そのもっとも重視を要すべき精神教育の上にも反省熟慮の余地が多いと思われる」と批判、近年のデマや怪文書の横行の弊害にも言及した。中途半端な内容だが、これが精いっぱいであった。

『東京日日』は十六日付「軍紀の振肅！陸軍首脳部の決意」で初めて事件にふれた。しかし、『東京朝日』と比べるとさらに腰の引けたものであった。

「国軍にとってこの際、何よりも大切なことは誤れる巷説の根源を礼して、これを払拭し、国軍を純化して、苛くも一点一抹の疑惑の隙なからしむることである。……永田局長の死がそのために幾分でも役立つということになれば、それも決して意義なしとはいえぬであろう」

また「陸相更迭後任者の責任」(九月五日)も「後任として陸相となる人は至公中正の態度をもって、肅軍の事績を上げ、部内の統一を強保するとともに、林陸相が最も力をそそいだ一面、即ち国民の一般的人心安定に寄与する苦心についても、これを十分継承すべき責任があると信ずる」と述べるにとどまっていた。

真正面から陸軍の暗闘に斬り込んだのは桐生悠々のみ

こうしたなかで、真正面から陸軍の暗闘に斬り込んだのはミニコミ誌『他山の石』にたてこもった桐生悠々一人であった。

悠々は「陸軍省内の殺人事件」(一九三五年九月五日号)で齒に衣を着せずズバリ
と言い切った。

「相沢中佐が故永田軍務局長を刺したのはいうところの『闇討』であって、卑怯これより大なるはない。巷間に汎読されつつある講談にいうところ 卑怯武士が夜陰に乗じて、試合に勝ったのを『闇討』ったと何の異るところがある。……しかも、陸軍省内に執務中、これを刺すが如きは、いうところ卑怯なる『闇討』でなくて何であろう」

同日付の「正に是一ギャング」では相沢事件を「この卑怯なる行為は、当世流行の一ギャングの仕業とも見ることができる」と断定したうえで「街のギャングは、今警察当局によって一掃されんとしつつある。陸軍内のギャングも、この機会に於て、軍規肅正の名の下に、林陸相によって狩られるならば、或は禍を転じて福となし得るかも知れない」と述べた。

二・二六事件の導火線となった相沢事件では、すでに五・一五事件でみせたような新聞の勇気や言論性は失われていたのである。

(つづく)

< 引用資料・参考文献 >

- (1) 『昭和憲兵史』 大谷敬二郎 みすず書房 1966年刊 119P